# 木匠の伊右衛門

伊右衛門は蚊帳越しの景色を好まない。

蚊帳越しの世間は如何にも霞んでいて、眸に薄膜の張ったが如き不快を覚える。伊右衛門は取り分け明瞭と目の前の拓けたのを好む訳ではないのだが、がさがさと擦瑕でもついたように世間が擦れて見えるのは嫌いだった。それだけではない。逆様に世間様から見たならば、蚊帳の中に居る己の姿こそ、研ぎ忘れた鏡に映る虚像の如くに霞んでいるのに違いない。その見え方は即ち、今この時の真実の己の姿に実に善く似合っていて、似合い過ぎているが故に何だか余計に厭だった。今の伊右衛門の人生は、当にそうした茫漠と暈けたものである。

ならばそれは、結局蚊帳そのものが嫌いなのだと言い換えても同じことだろう。

そもそも蚊帳という奴は捉え処がなくて扱い難い。そのうえ疎ましく思っている訳だから、毎夕毎夕いちいち吊るのが面倒になる。そうはいっても、藪蚊如きに好き放題そちこち食われるのも癪に障る。一晩中蚊を追ってくれる者など勿論居らぬし、あちらこちらに蚊柱が立つ程の澱んだ水辺の安普請であるから、夏ともなれば否応なしに小さき虫は紛れて来る。仕方がなし、大層億劫な仕草で蚊帳を吊ることになるのだが、吊り終って後は甚だ気分が悪い。





だから今宵も伊右衛門は、誰が見ている訳でもないというのに、酷く不機嫌を装って儀式の如く蚊帳を吊った。吊り終って暫くはその真ン中に立ちはだかっていたものの、結局馬鹿馬鹿しくなって夜具の上に腰を下ろした。孤座ってみたまではいいが、横になるでもなく、足を伸ばすでもなく固まっている。何とも落ち着かぬ。蚊帳で四角に仕切られた曖昧な空間が細かく伸び縮みしているように思えたからだ。目を遣れば、そもそも心許ない夜燈がちろちろと瞬いている。却説は油でも切れたかと、躰を伸ばし頸を伸ばして角行灯の中を覗けば、蛾が一疋、紙の壁に当たって蹌いている。かさこそと、微かに乾いた音がした。

伊右衛門は無言でそれを眺めた。やがて蛾は灯火に焦げて死んだ。

閑寂とした。

寝る気も失せて、伊右衛門は蚊帳越しに霞んだ外を眺める。薄膜一枚隔てた夜は奈落の底のように昏い。墨を流したような黒である。何もない。蚊帳を外してしまえば己もその闇に呑まれてしまうのに違いない。

――その方が善いのだ。

何故それができないか。

伊右衛門は眉根を寄せて俯いた。

その時――。

闇の彼方が僅か振えた。戸板を叩く音だ。続けて声がした。

「旦那さん。伊右衛門の旦那さん。手前でやす。直助でやす」

「開いておる。戸締まりはせぬ」
ぞろぞろと戸の開く気配がして、夜陰が蠢く。黒い塊が這入って来る。
得体の知れぬ塊はぞろりと戸を閉め、戴きやすぜ――と言葉を発した。ぴちゃぴちゃと水の滴る音がする。溜息らしきものに続いて、かたり、と柄杓を置く響きが聞こえる。水を飲んだのだろう。水瓶に蓋を被せ、塊は畳を擦る音をさせて蚊帳の外で止まった。
掠れた闇にぼう、と面相が浮かんだ。凹凸の少ない、卵の如き顔である。
狐狸川獺の類ではない。名乗った通りの顔馴染、直助本人の熟面だった。
直助は深川万年橋の町医者西田某の許に住込で働く、所謂下男である。
何の縁かは忘れたが、人嫌いの伊右衛門と言葉を交わす、数少ない知辺のうちのひとりだ。
直助は、卵に切れ目を入れたが如き細長い眼で蚊帳越しに伊右衛門を見た。感情は読めぬ。
「どうにもいけねえなァ。そう四角張ってちゃあ、寄る女だって寄りゃあしねえ。誰が見張ってる訳じゃなし、膝くらい崩したらどうなんです」
「この――この方が善いのだ」
「へえ、そうですかい。そうして蒲団の上に陣取って、四方八方藪睨み、まるでこれから御腹でも御召しになろうかてェ面体だ。好きでそうしてるとも思えねえ」
「夏夜を好かぬのだから詮方ない」
「そんなに蚊帳が嫌えなら、何も毎夜毎晩、律儀に吊るこたあねえでしょう」
「吊らずとも善いものであろうか」





「当たり前でしょうよ。この破れ長屋で蚊帳吊ってるのは旦那くらいのもンさね」
「吊らずば蚊が食う」
直助は、くちぶとが怖くってドプ板横丁に住めますかい――と言って尻を捲り、手拭いで頸の後ろを拭いた。そして、お袖の奴も言ってましたぜ――と続けてから伊右衛門を再び見た。お袖というのは伊右衛門と同じ長屋の斜向かいに住む十七八の娘である。直助の妹だという話だが、真実か如何か、伊右衛門は詳しいことを知らぬ。伊右衛門は蚊帳の外に問うた。
「袖殿が――お前に何と申したと言うのだ」
「伊右衛門の旦那は生真面目でいけねえと」
「いけないかな」
いけねえこたあねえですが――と言うや否や、直助は笑った。
「まあいいやな。旦那ってェお人は、そこがいいんでしょうよ」
伊右衛門は憮然とするばかりである。何が可笑しいのか解らぬ。
「それより直助。このような刻限にいったい何用なのだ」
「まだ宵の口でしょうよ」
「それは人によるであろう」
「手前には昼も夜もねえんです」
ふ、と直助から表情が消える。周囲の闇がつるりとした顔に滑り込んで、人だか闇だか判然としなくなる。蚊帳越しであるから、それは一層朦朧としている。

「住込の下僕が夜遊びとは良い身分ではないか」
「遊びも遊び、袖の寝起でやすよ」
「加減が――悪いのか」
袖は気さくな娘だが、どうも病がちであるらしい。何の病か、伊右衛門は立ち入ったことは尋かぬようにしているが、寝たり起きたりもう三月近くの長引きようであるから、いずれ質の悪い病なのに違いはあるまい。病床の身内の世話をした帰りなら責める訳にも行かぬだろう。
伊右衛門は豪く小さな声で、すまぬ――と詫びた。
「二三日外に出ておらぬ故、一向に気づかなんだが」
「心配はねえです。毎度のことでさ。それでね――」
直助の声音が急に曇る。多分顔を背けたのだろう。
ぴちゃり、と音がした。
柄杓の雫が垂れたのだ。
「旦那――」
低い声である。
「人ってえのは」
ぴちゃり。
人ってえものは――直助は同じことを繰り返して黙った。
伊右衛門は躰の方向を変える。幕面に投じられた己の影がぐるりと移動する。





この続きは、書籍でお楽しみください。
◎注意
本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。
個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。